

カルチャーショック

連載第3回

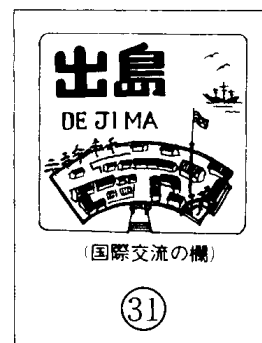
MATSUO TOSHIO
松尾 寿夫

カナダ・ケベック州のシクーチミ市にあるケベック大学に客員研究員として、1982年3月末から1年間滞在した。シクーチミ市は州都ケベック市から北へ200km程の所にあり、人口7万人程度の街であった。カナダの中でもフランス語を使用しているケベック州はカナダから独立しようという気運が強く、私が滞在していた頃もあちこちでそれに関する落書きを目にした。文化的な生活ができる北限の地にも近かった。

シクーチミで日本人は私の家族だけであった。言葉は通じるだろうか、寒さは大丈夫だろうかと不安なまま、生後6カ月の子どもも含めて一家5人で生活を始めたが最初は車がなくて大変だった。春も盛りの日本から、零下20度の土地に突然に暮らし始めたのだから無理もないが、強い風と寒さの中を歩いて買い物に行く時は息をするのも辛く、非常に疲れたことを覚えている。車が手に入ってからは何をするのも快適だった。近郊をドライブしたり、ショッピング・センターをぶらぶらしたりして家族全員で楽しんだ。5月になってナイアガラの滝まで初めての家族旅行をしたが、滝のスケールの大きさに圧倒されたり、一度に咲き乱れる春の花々の美しさに感動した。また、夏休みにはプリンスエドワード島まで東海岸地方を旅したことが忘れられない良い思い出となっている。

大学はアパートから歩いて5分位の所にあった。いつも昼休みには地元の人たちと同じように家へ帰って家族と一緒に昼食を取った。日本にいる時と違って、雑用に振り回されずゆったりと実験や研究に専念できた。カナダでは夏時間を採用しているが、いつから夏時間になるのか分からず、ある日、研究室に行ってみるといつもと様子が違ってみんな仕事にかかっていた。その日から夏時間だったのである。夏時間から冬時間へ変わる時は、その逆で私が研究室に行かずいぶん経ってからみんな出てきた。こういうことも楽しい経験だった。

一緒に行った小学2年と4年の子どもは新学期が始まる9月から現地の小学校に通った。冬になると零下30度以下まで寒くなる土地柄のため各学年1クラスだけの小さな規模の小学校がたくさん設けられていた。アパートのすぐ近くにある小学校であったが大型のス



クールバスに毎日二往復も乗れて子どもたちは大喜びだった。雪が降り積もる頃になるとアイスホッケーやスケート、スキー、そり遊び等を友だちから教えてもらい、長崎ではできない冬の遊びを十分に楽しんだ。

豊かな天然資源のためカナダの国民性はゆったりとしている。日本と同様に銃の所持は禁じられており、治安は良く住みやすい国であった。最初心配した事も実際に暮らしてみると大して問題にならず、研究室の人々や子どもたちを通して知り合った人々のおかげで楽しく過ごすことができた。機会があったらもう一度訪ねてみたいと思っている。

(留学生指導主事・工学部教授)

KOUNO ISAO
河野 功

我々は伝統と未開を素材とした原料を研究対象にする事が多く、材料(植物)を求めて手近な中国・東南アジアに手(足)を伸ばすこととなる。しかし、材料の供給を受けるだけで現地にも何もフィードバックしないのでは信義にもとるので、出来るだけ現地の研究者と共同研究という形を取ることが多い。欧米に比べて貧弱と言われながらも、最近そのための種々のプログラム、システムが整えられ留学生、研究者の交歓が活発に行われるようになってきていることは我々にとっては喜ばしいことである。

昨年このようなプログラムの一貫としてタイより短期間研究者を受け入れる機会があったが、交歓を前提としているためその約半年ほど前にタイを訪れた。赤道直下の地域には初めての旅行であったが、思ったよりも穏和な気候で何よりも鳥達と色彩鮮やかな花々が目を楽しませてくれた。タイはランの輸出国としても知られているように、一年中花々が咲いているところである。ところで、後で周知のことと知ったが、タイの交通事情は極めて悪く朝夕のラッシュは日本の大都